

羽田空港の国際化の効果等 に関する調査

(一財)運輸政策研究機構

前国際業務室長 高田 陽介

招聘研究員 三崎 秀信

主任研究員 林 泰三

前研究員 平田 輝満

研究員 栗原 剛

調査の背景

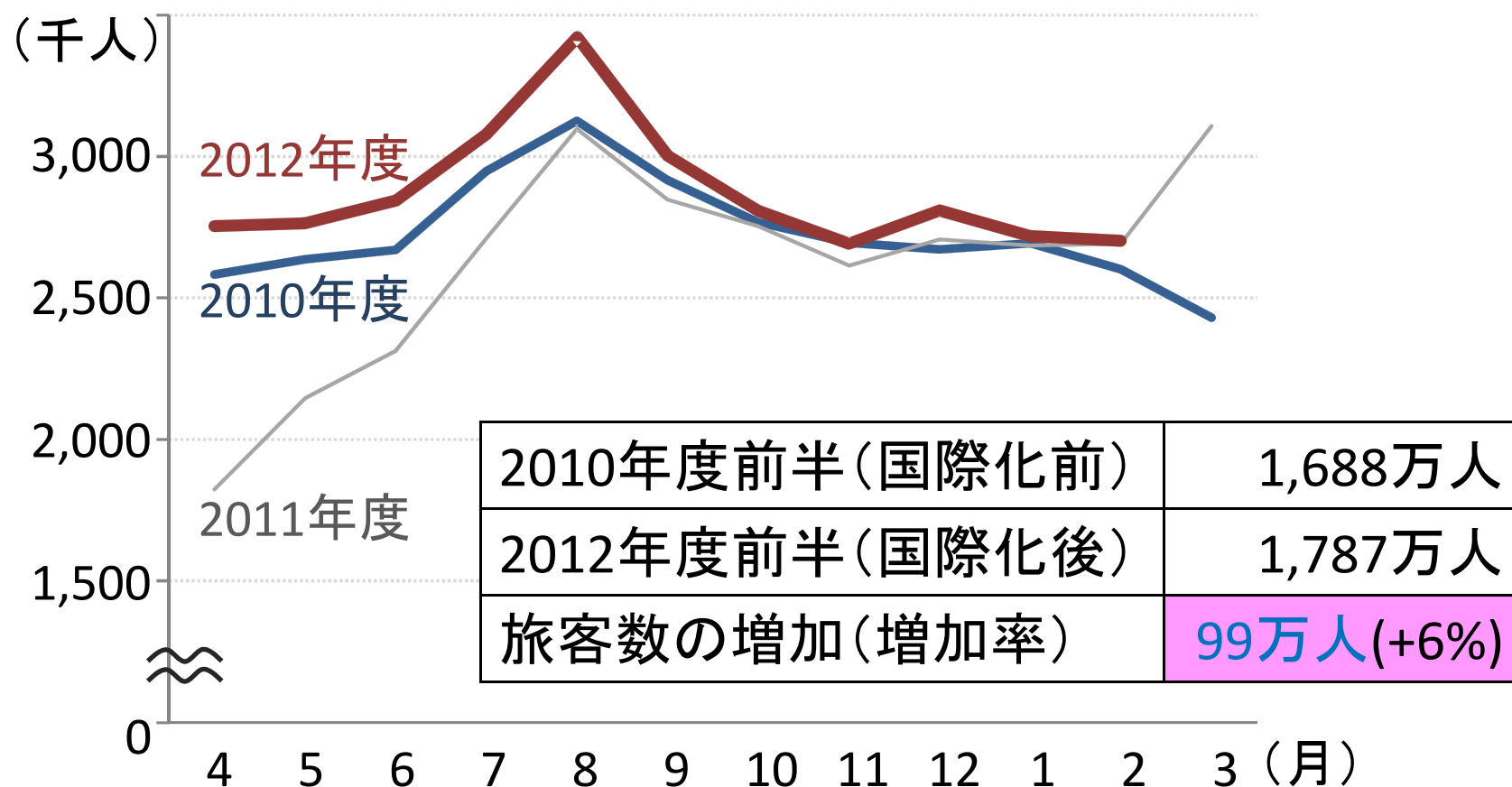
羽田空港の国際化(2010年10月)

- ・昼間時間帯(6～23時)にはアジア近距離定期便が運航
- ・深夜・早朝時間帯には欧米を含む世界の主要都市に向け新路線が就航。

方面		近距離アジア (東アジア)						中距離アジア (東南アジア)				北米					欧州		
目的地		ソウル(金浦)	ソウル(仁川)	北京	上海(虹橋)	台北(松山)	香港	バンコク	デンパサル	クアラルンプール	シンガポール	デトロイト	ホノルル	ロサンゼルス	ニューヨーク	サンフランシスコ	フランクフルト	ロンドン	パリ
週当たり便数	2010年 8月	56		28	28		14												
	2012年 8月	84	14	28	28	56	28	21	5	7	28	7	21	14	7	7	7	5	7

国際線乗降旅客数(羽田・成田合計)

○羽田空港の国際化前(2010年度前半(4~9月))と比較し、
2012年度同時期の羽田・成田合計の国際線旅客数は、約100万人増加。(約6%の増)



データ: 空港管理調書・東京航空局

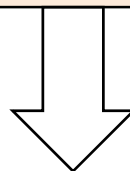
調査の目的

今般の調査においては、

- ・国際航空旅客動態調査(国土交通省)の活用
- ・関係方面を対象としたアンケートの実施

等により、各種基礎データを収集。

→首都圏をはじめとする国際線旅客への効果、メリット等を把握。



今後とも増大が見込まれる首都圏国際航空需要への対応ぶりに
つき考察する上での実質的かつ有効な材料。

調査事項(全体構成)

国際航空旅客動態調査(国土交通省)データを活用

羽田空港の国際化前後における、国際線航空旅客の動態(旅行目的、空港へのアクセス時間、経由空港の変化)を把握。

→国際化に伴い、旅客が享受したメリット等につき検証。

空港利用者を対象に、ウェブアンケートを実施

羽田、成田空港の利用者を対象に、空港の選択理由等を把握。

→国際化に伴う実質的な効果等につき、利用者目線から検証。

旅行会社を対象に、アンケート調査等を実施

羽田空港の国際化に伴う旅行商品の内容、価格の変化等を把握。

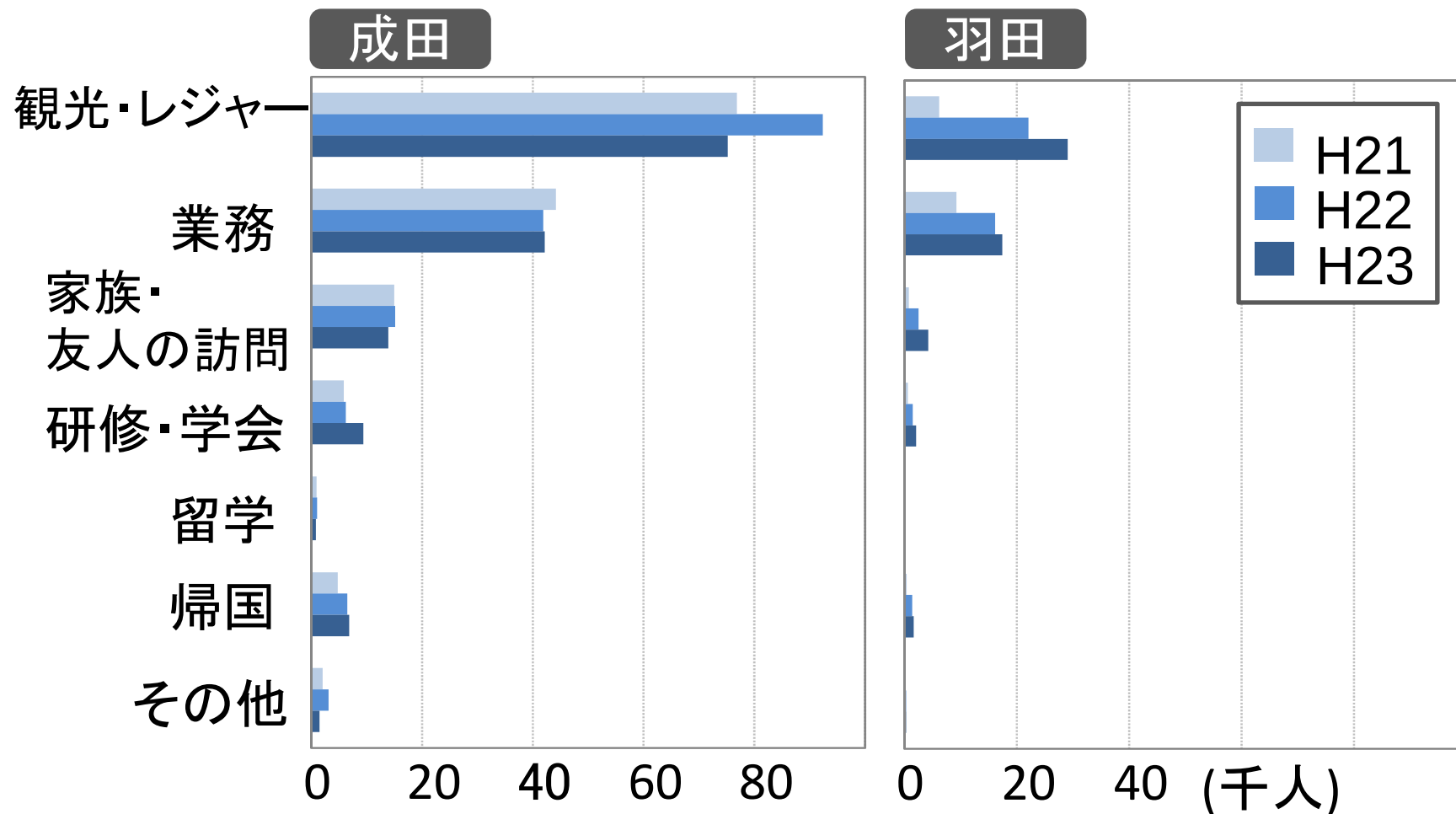
→旅行商品の造成・販売に及ぼした影響等につき検証。

本日のアウトライン

1. 羽田空港国際化前後の航空旅客流動の変化
2. 羽田・成田空港利用者による空港選択の実態
3. 海外旅行商品の造成・販売への影響
4. まとめ

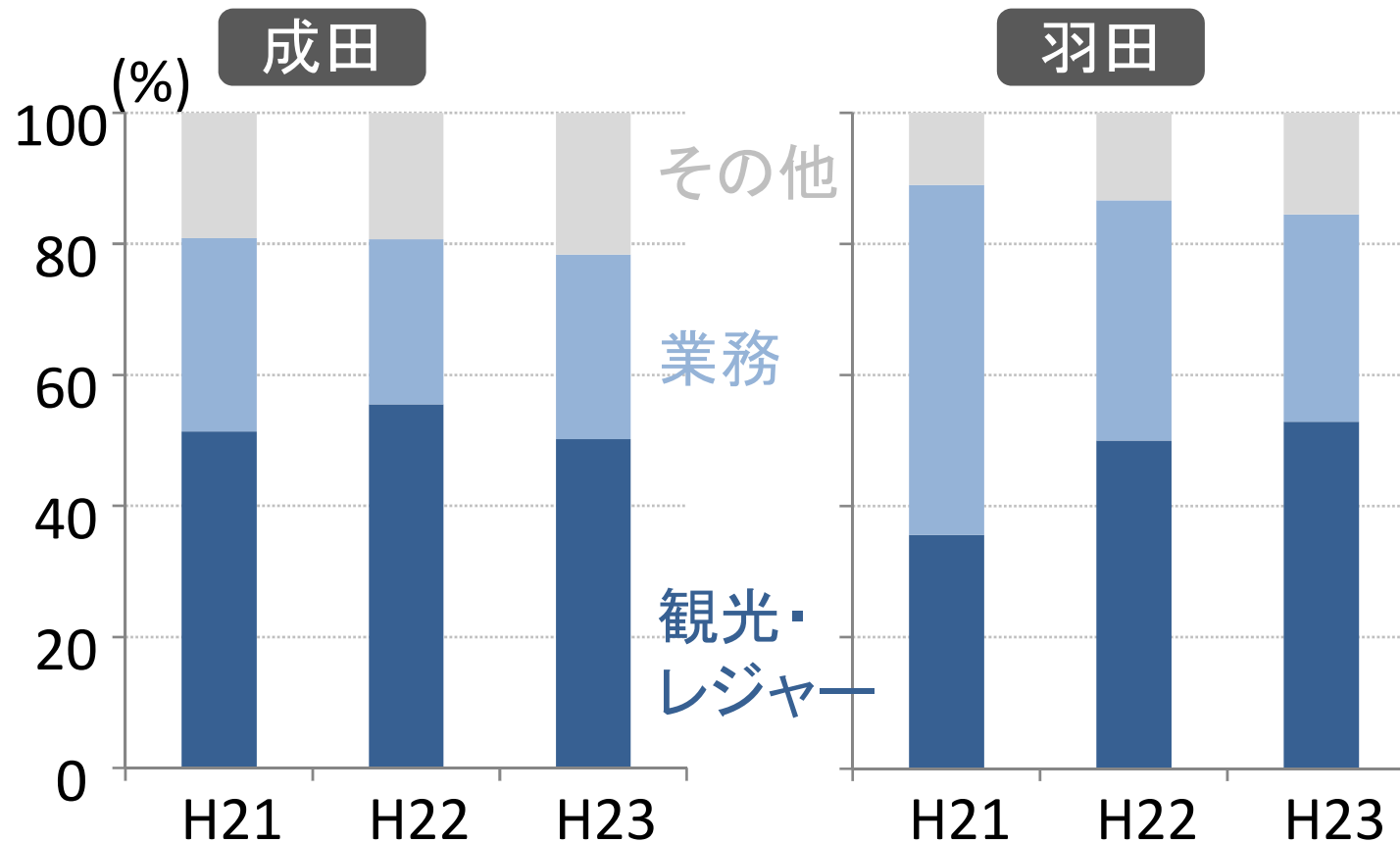
〔H21-23〕成田・羽田空港における旅行目的別旅客数

○羽田空港では、国際化後において、観光、業務目的ともに旅客数が増加傾向。



〔H21-23〕成田・羽田空港における旅行目的別割合

- 割合ベースで見た場合、羽田空港は、
 - ・ 国際化前は業務目的の割合が大きかった一方、
 - ・ 国際化後は観光・レジャー目的の割合が増加。
- 他方、成田空港については、旅行目的別割合に大きな変化なし。



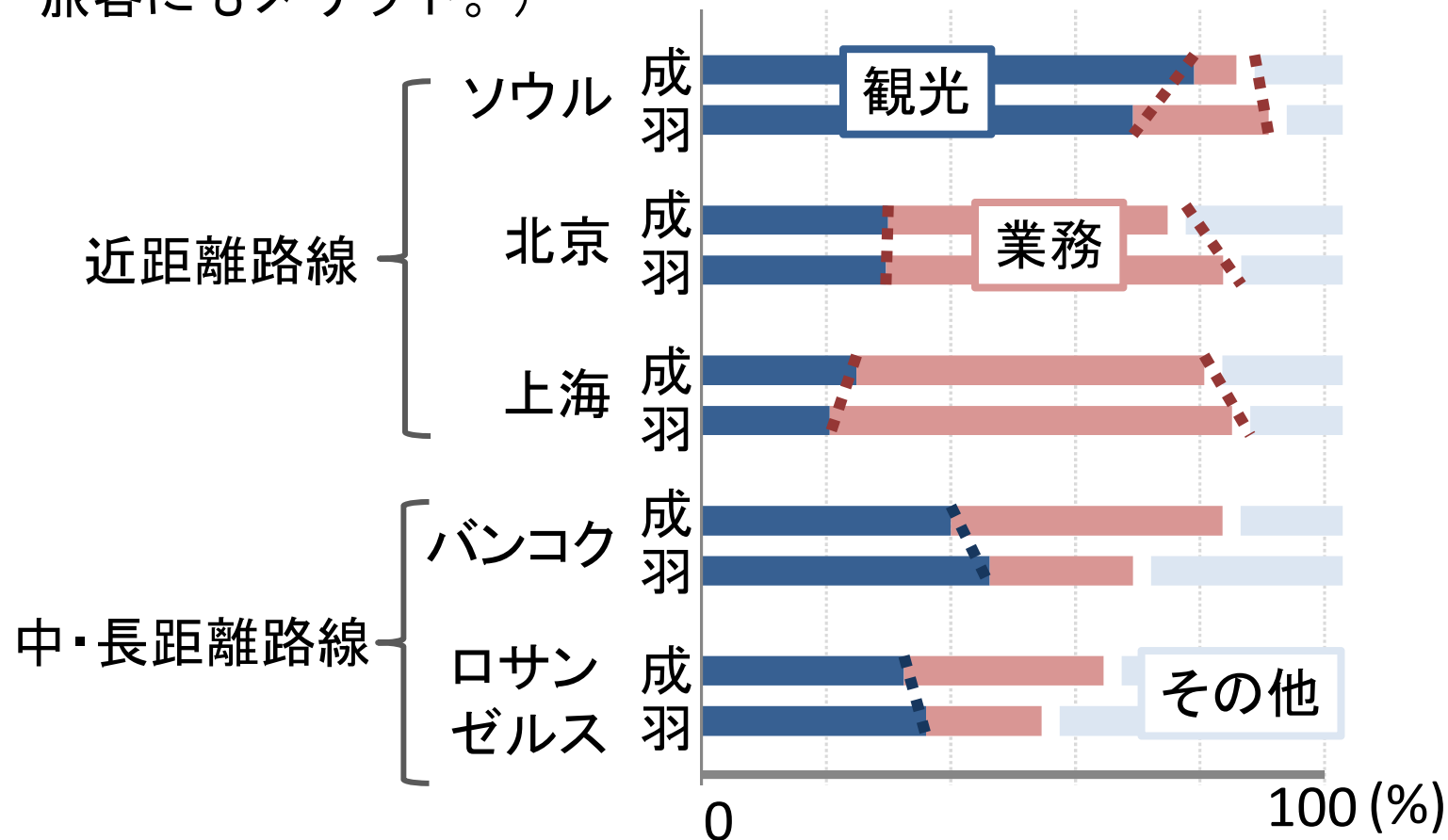
〔H23〕 路線別の旅行目的

○ 近距離路線（羽田：昼間運航）

→羽田における業務目的の旅客割合が高い。

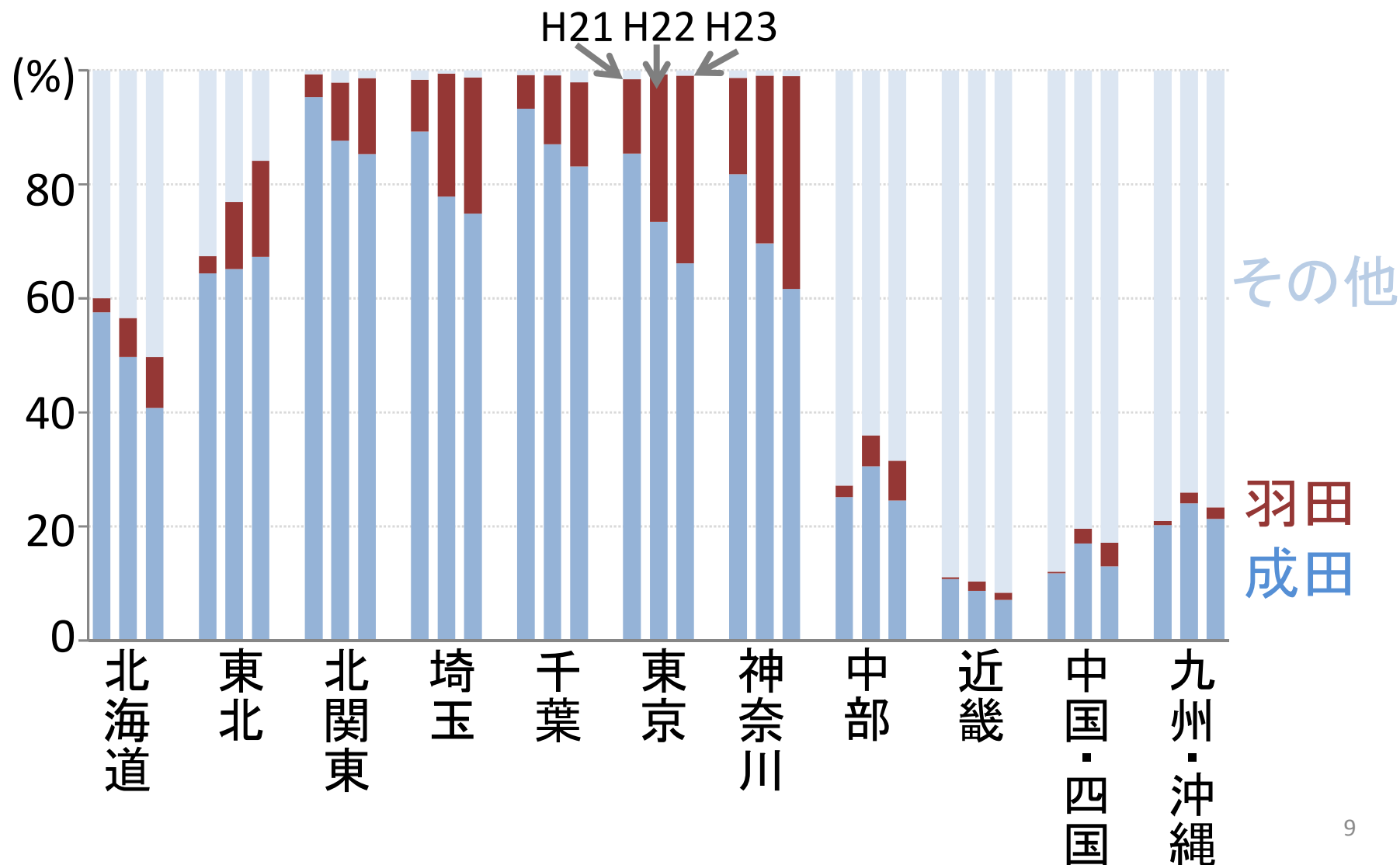
○ 中・長距離路線（羽田：深夜・早朝運航）

→羽田における観光目的の旅客割合が高い。（深夜・早朝便は観光目的の旅客にもメリット。）



〔H21-23〕 出国空港別の旅客割合（利用者の居住地別）

- 特に、東京・神奈川の居住者については、羽田利用の旅客割合が増加。
- 他地域においても、羽田利用の割合は総じて増加傾向。

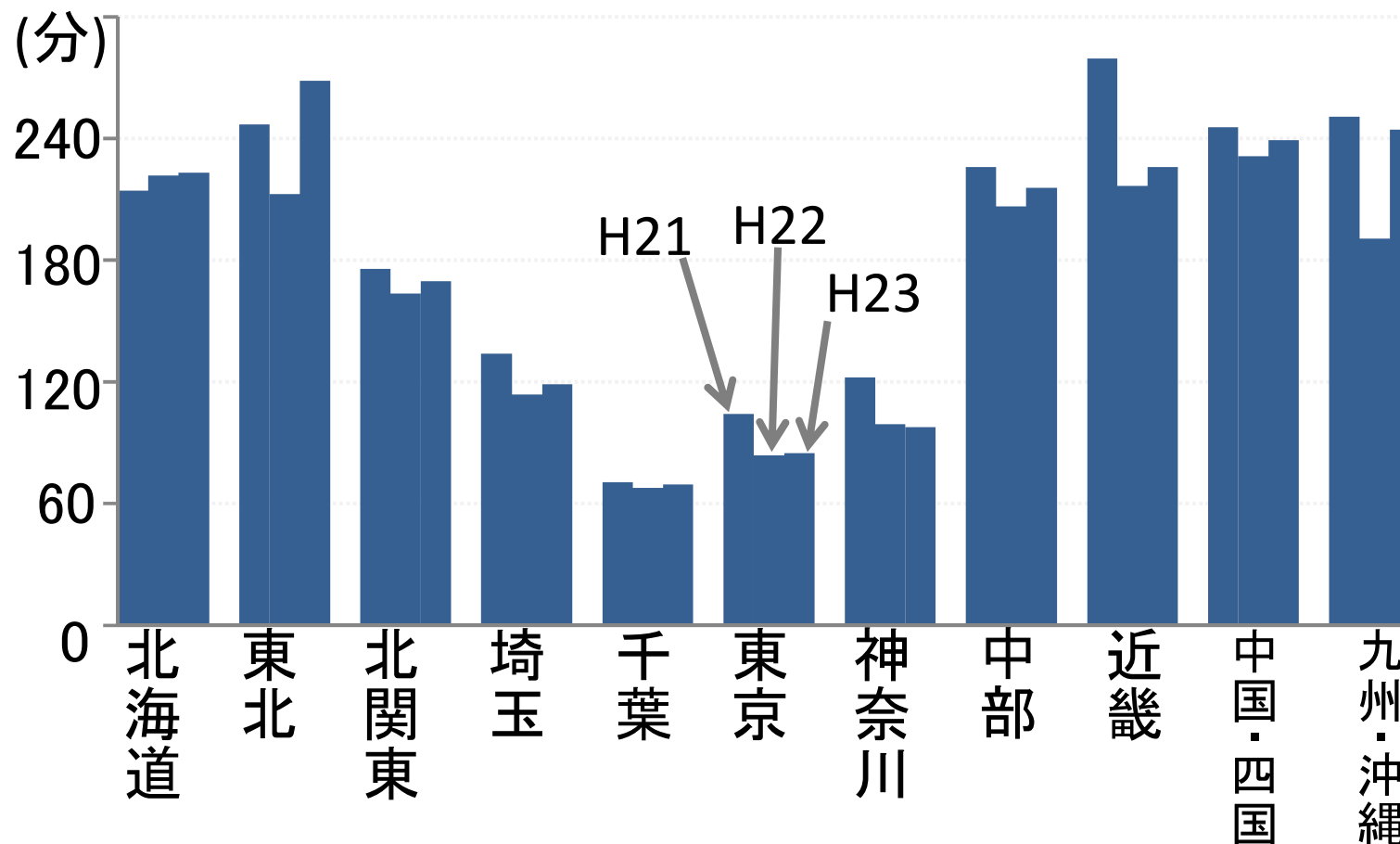


〔H21-23〕 空港へのアクセス時間の推移（成田、羽田の平均）

○ 羽田空港の国際化前（H21）と比較して、国際化後（H22・23）では平均アクセス時間が減少。

○ 特に、東京、神奈川居住者のアクセス時間が減少傾向。

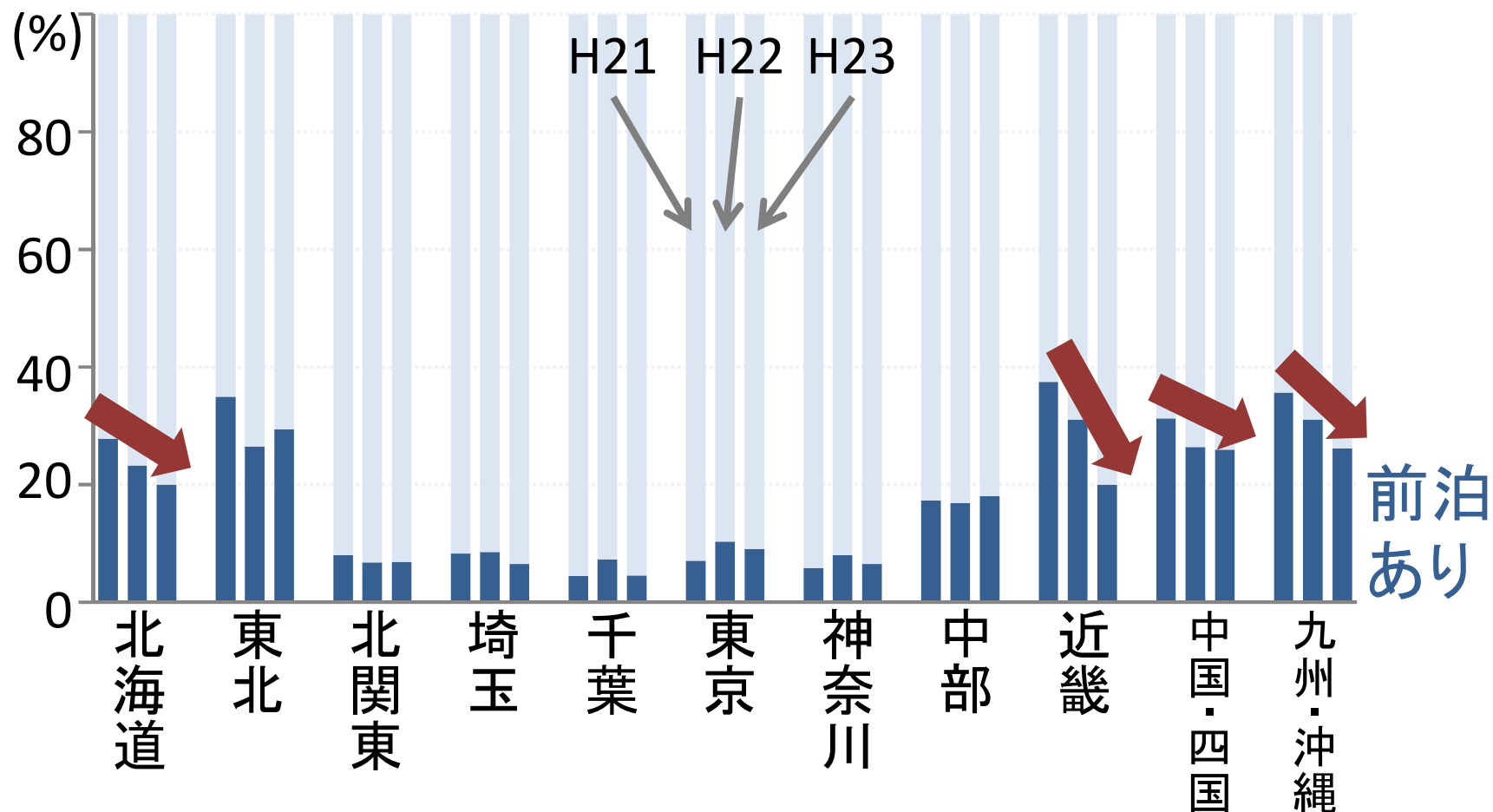
→当該地域の旅客を中心に、アクセス利便向上に係るメリットを享受。



*首都圏を除く道府県については、県庁所在地を含む 207生活圏ゾーン内居住者のみ抽出。¹⁰

〔H21-23〕 前日宿泊率の推移（成田、羽田の平均）

- 地方在住の首都圏空港利用者が前泊（前日宿泊）する割合は減少傾向。
→ 羽田空港の国際化に伴う国内・国際乗り継ぎの利便性向上の効果の現れか。



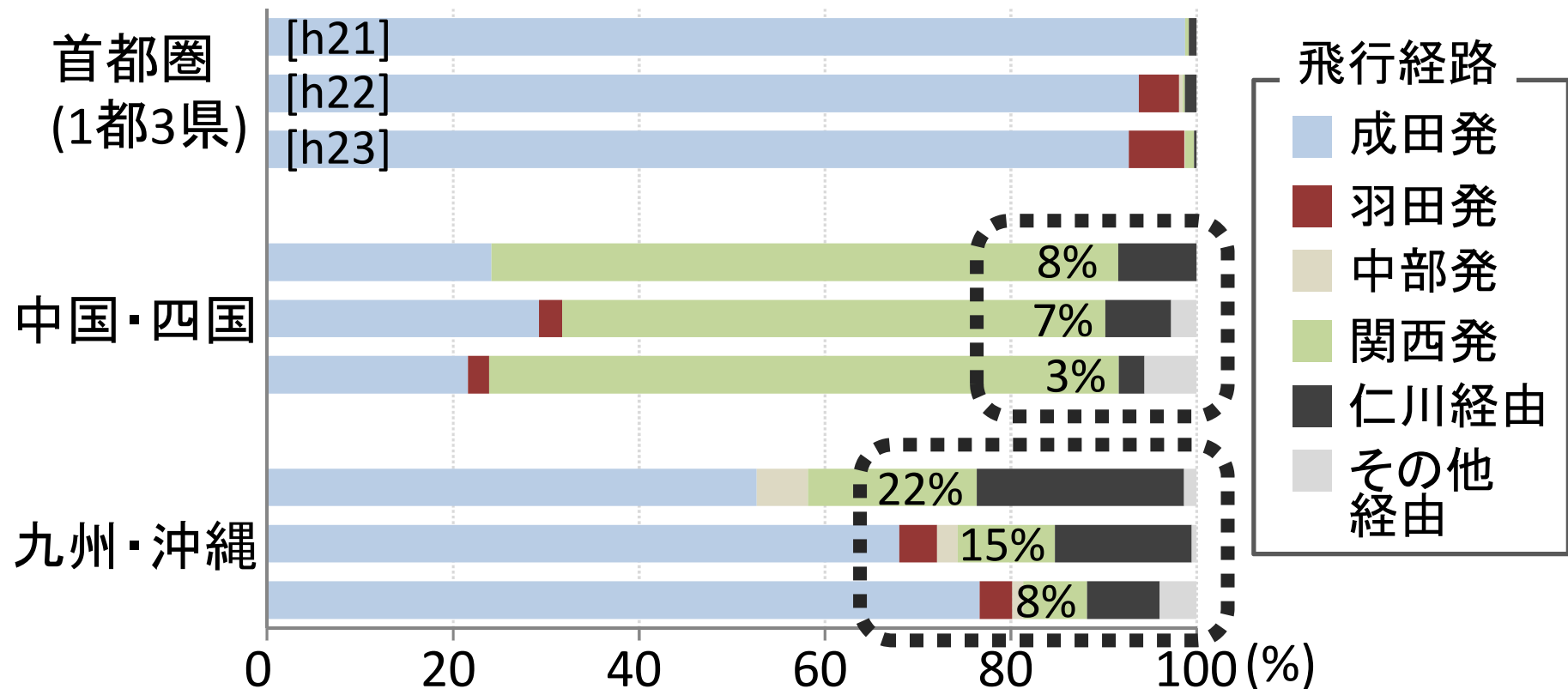
*首都圏を除く道府県については、県庁所在地を含む207生活圈ゾーン内居住者のみ抽出。¹¹

〔H21-23〕欧州方面への旅客による飛行経路の変化

○首都圏からの旅客については、羽田空港の国際化前後において、特に大きな変化なし。（首都圏空港全体のシェアは、一貫して、ほぼ100%）

○他方、中国・四国、九州・沖縄からの旅客については、羽田の国際化後において、仁川空港（韓国・ソウル）経由の割合が段階的に減少。

→国際化後における、首都圏空港の乗継利便向上（国内・国際）の効果の現れか。



本日のアウトライン

1. 羽田空港国際化前後の航空旅客流動の変化
2. 羽田・成田空港利用者による空港選択の実態
3. 海外旅行商品の造成・販売への影響
4. まとめ

ウェブアンケート調査手法、具体的内容

○羽田・成田空港利用者の空港選択理由等の実態について把握すべく、ウェブアンケート調査を実施。

調査は、直近1年間に羽田・成田（一部地方）空港を利用して海外旅行をした2,800人を対象。

首都圏（埼玉、千葉、東京、神奈川）	2,000
東北（青森、岩手、宮城、秋田、山形）	300
北陸（富山、石川、福井、新潟）	200*
九州（福岡、佐賀、長崎、大分、熊本）	300*

*北米本土、欧州路線利用者に限る

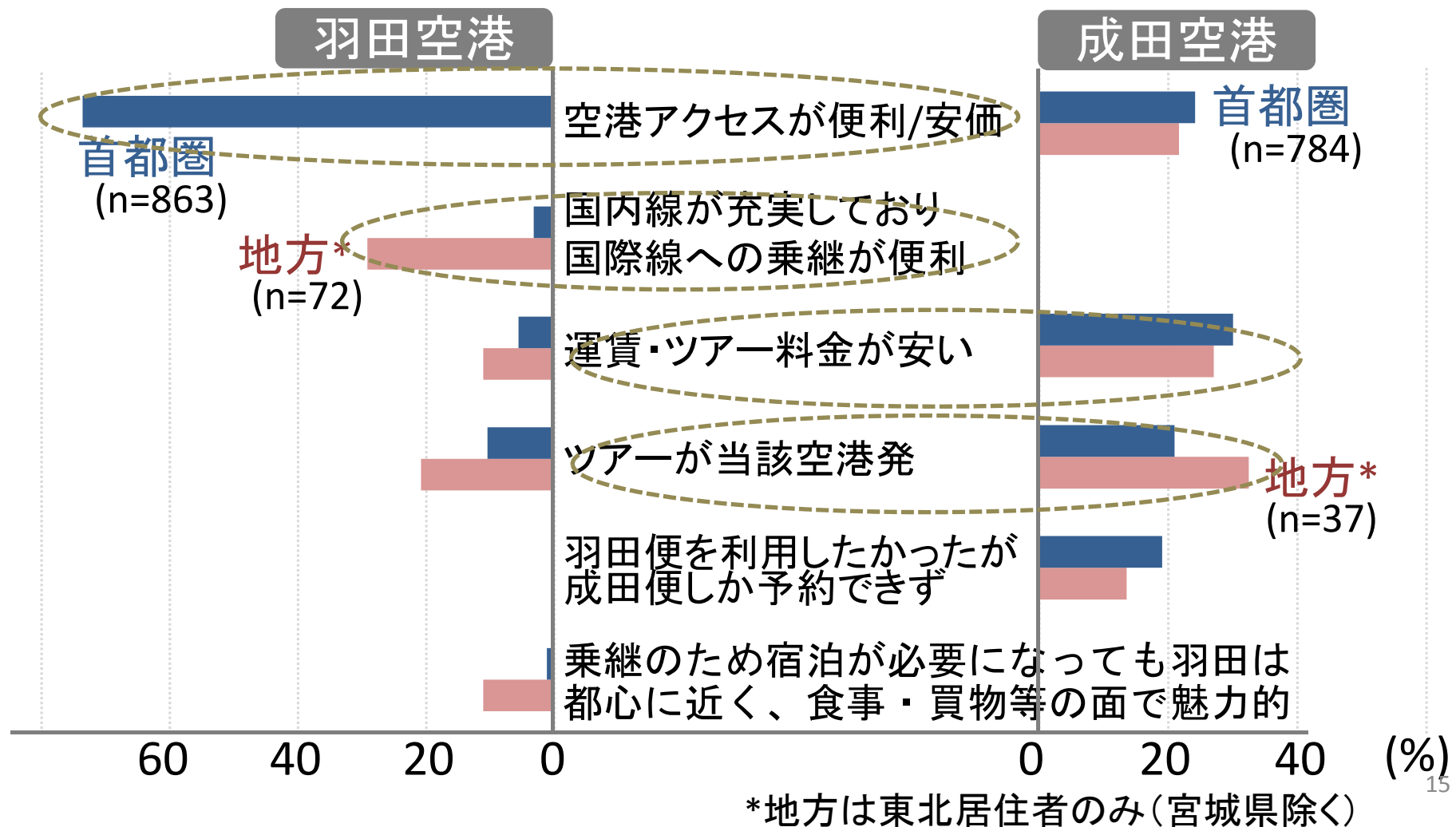
○今般のアンケート調査の主な重点は、

- ・空港選択理由
- ・羽田空港の国際化後における利便性
- ・羽田空港の国際化と海外旅行

羽田・成田空港選択理由(東アジアの近距離路線の場合)

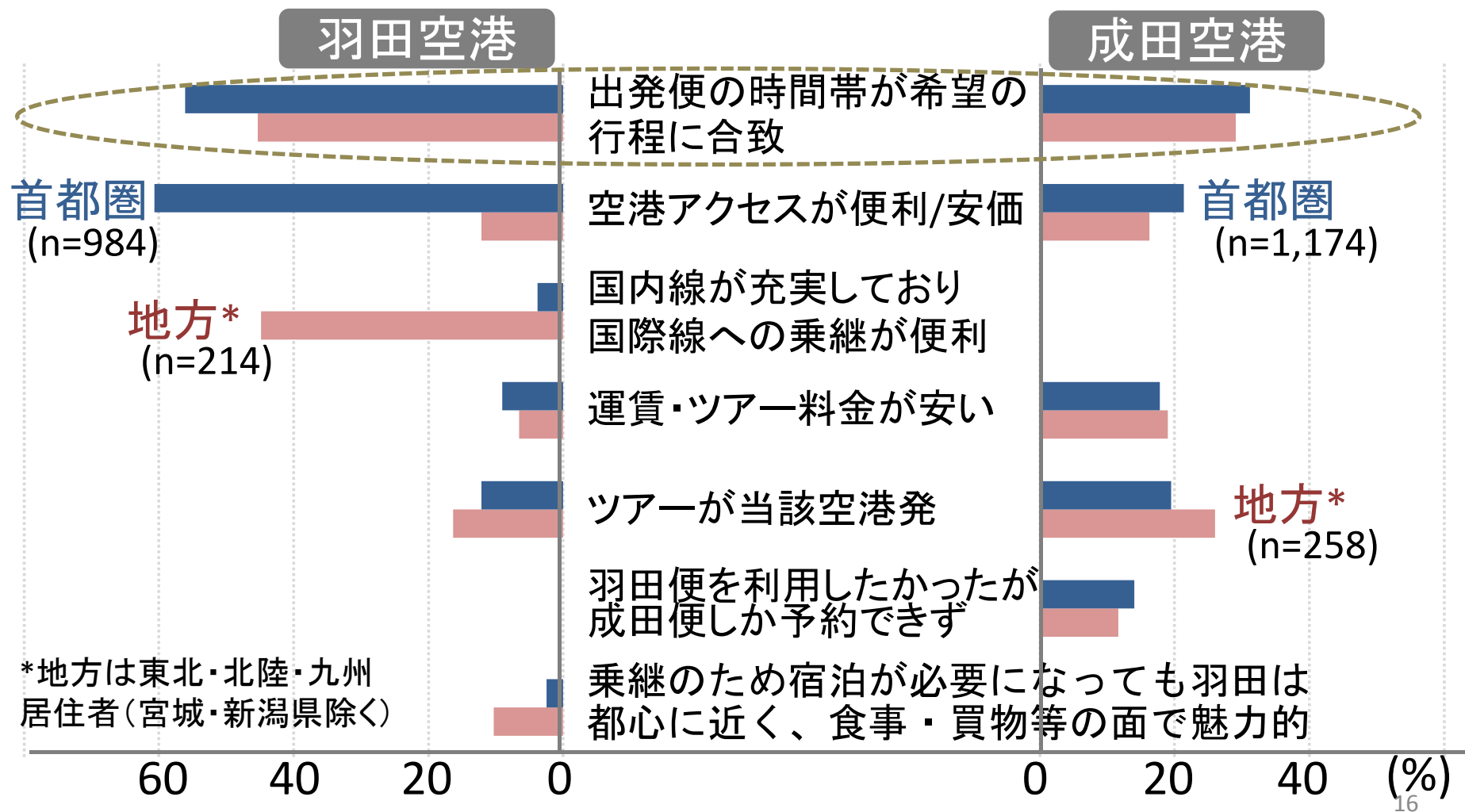
○羽田は、首都圏居住者の「**空港アクセスに係る利便性**」および地方居住者の「**羽田における国内線の充実**」を理由とした割合が高い。

○成田は、「**運賃・ツアー料金が安価**」を理由とした割合が高い。



羽田・成田空港選択理由(欧米等の遠距離路線の場合)

○羽田・成田ともに「**出発便の時間帯が希望の行程に合致**」を理由とした割合が高い。

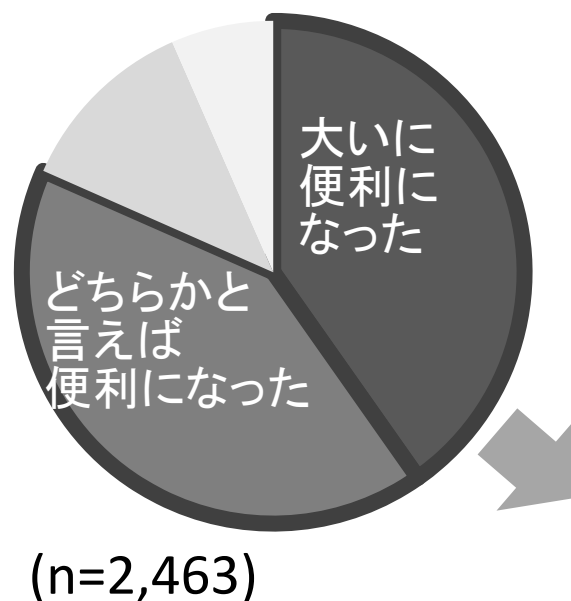


羽田空港国際化後の利便性

○「大いに便利になった」「どちらかと言えば便利になった」の回答割合は全体の80%。

○全体的に、深夜発着便創出と便数増加を評価。

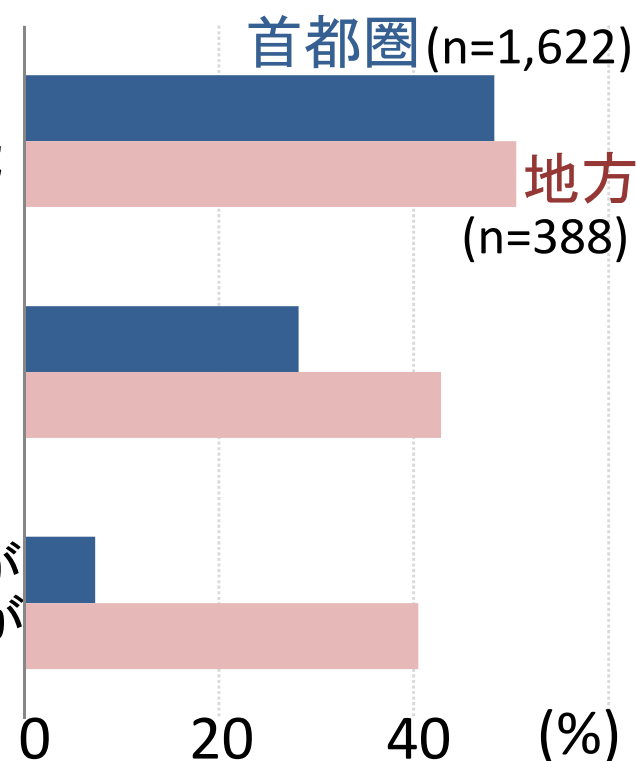
○地方居住者は国内線乗継の利便性を評価。



羽田では(成田にはない)深夜発着便の運航が可能になった点を評価。

首都圏発着便数が増え、予約が容易になった点を評価。

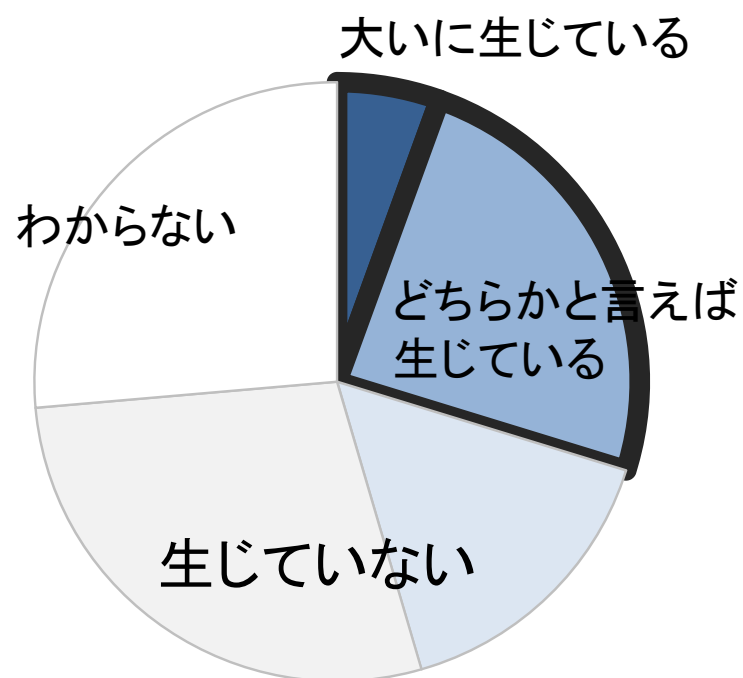
国内線が充実している羽田が国際化し地方空港との乗継がスムーズになった点を評価。



羽田の国際化等に伴う会社への影響

○羽田の国際化、成田の空港容量の増加が回答者の会社に与えたプラスの影響の有無につき尋ねたところ、全体の3割強が生じている旨、回答。

○影響に係る具体的内容を尋ねたところ、主に深夜・早朝便ができたことによる業務の効率化に関する回答が多い。



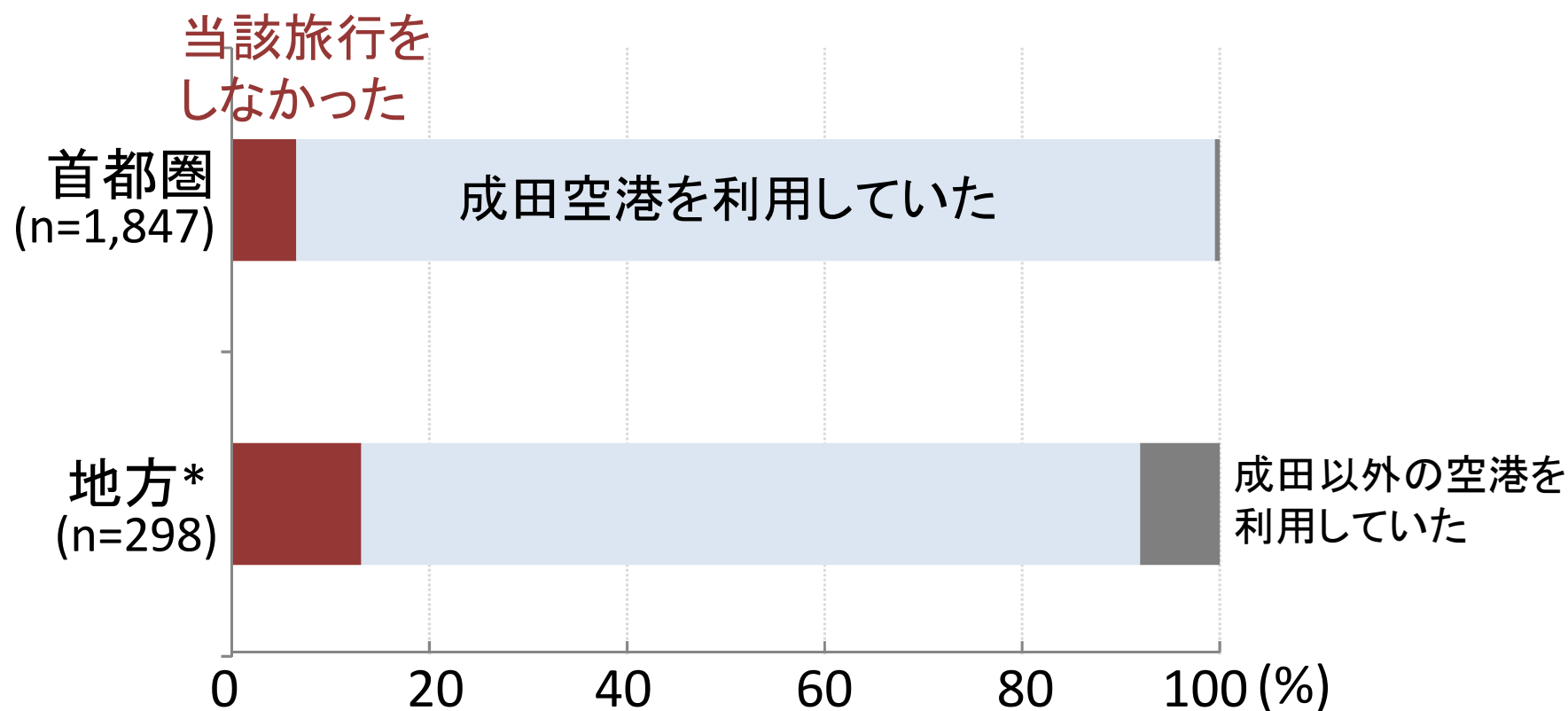
影響に係る具体的内容

- ・海外出張の直前や直後に、国内業務を処理することができる。
- ・日帰り出張や1泊2日の出張が可能になった。
- ・成田発着では日程上、出張を断念せざるを得ない場合でも、羽田発着であれば出張が可能になるケースもある。
- ・出張旅費の節約につながった。

羽田空港が国際化していない場合における対応

○当該旅行をしなかった、とする回答が全体で7%。(首都圏を除く地方では、平均13%)

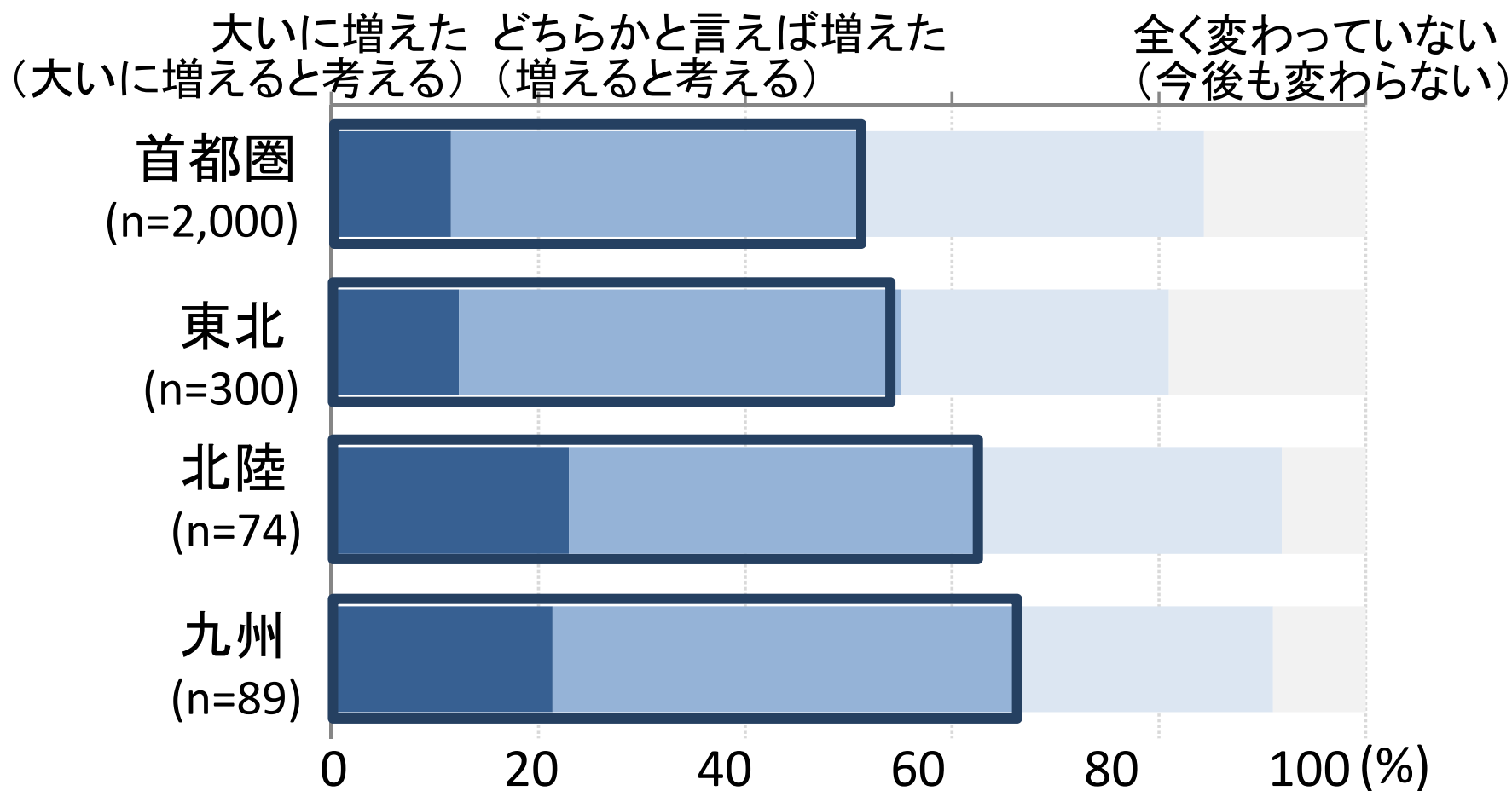
→羽田空港の国際化は、旅行に係る新規需要の創出に一定程度、寄与。



*地方は東北・北陸・九州居住者(宮城・新潟県除く)

羽田空港国際化後の海外旅行回数

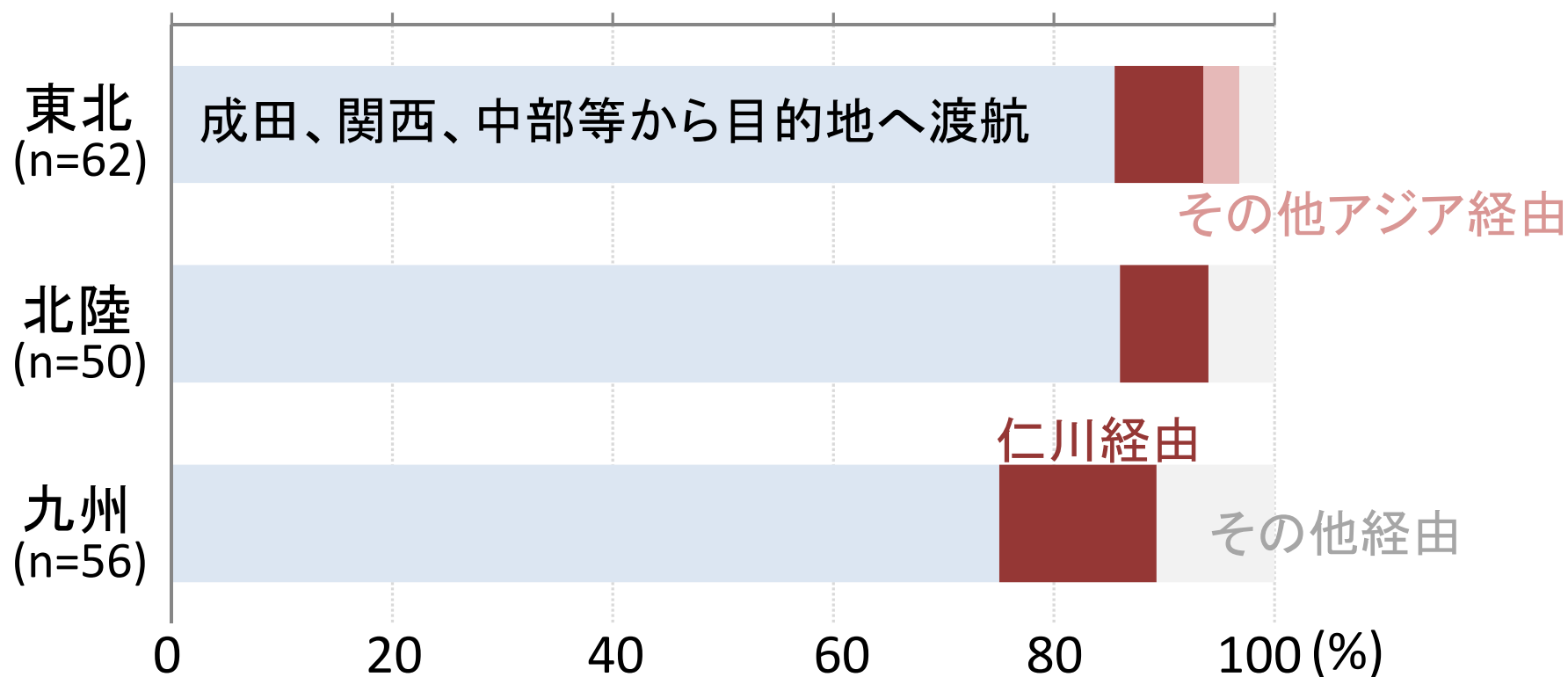
○海外旅行回数が「大いに増えた(今後、大いに増えると考えてる)」「どちらかと言えば増えた(今後、増えると考えてる)」とする回答が過半数。



羽田空港国際化前の渡航時における飛行ルート

○今回の羽田利用者のうち、国際化前に同一目的地に渡航した方を対象に、前回渡航時の飛行ルートについて確認。

○地方居住者のうち、8～14%の方が、前回は仁川経由を選択したものの、今回は羽田空港にて国内乗継。



本日のアウトライン

1. 羽田空港国際化前後の航空旅客流動の変化
2. 羽田・成田空港利用者による空港選択の実態
3. 海外旅行商品の造成・販売への影響
4. まとめ

調査手法、具体的内容

○羽田空港の国際化の海外旅行商品への影響について把握すべく、昨年度末にアンケート調査を実施。

調査対象は、「日本旅行業協会」(JATA)に加入し、首都圏に本社を置く旅行会社(約400社)。本年4月末現在で50社強から回答あり。

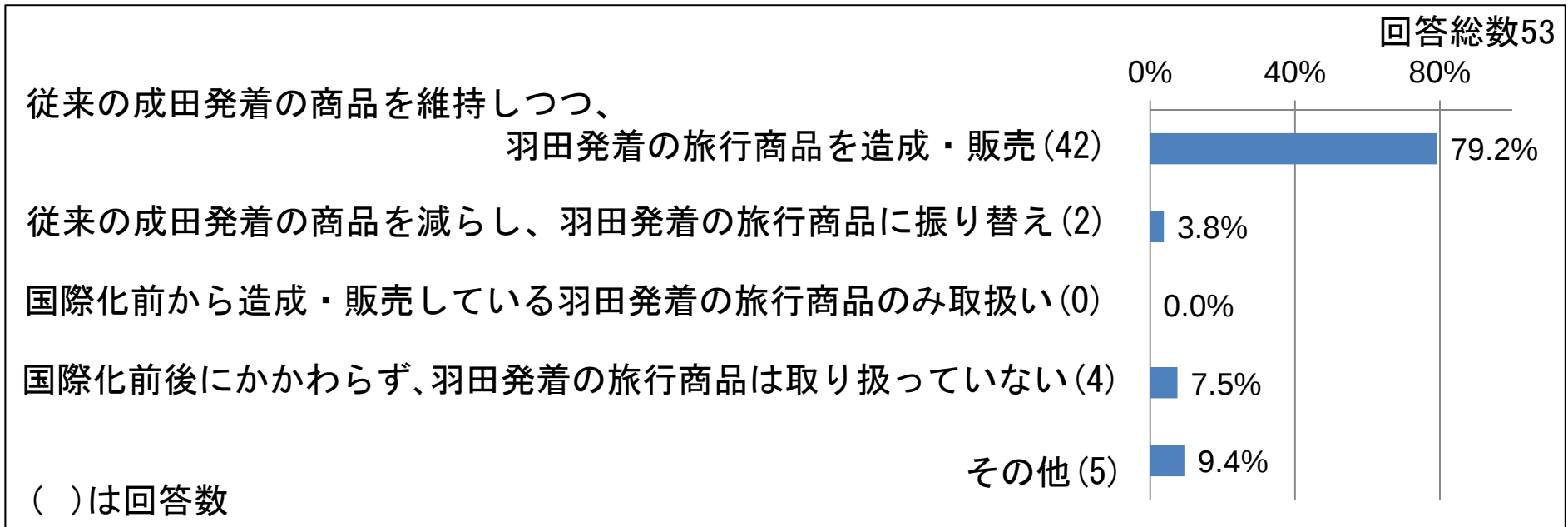
○今般のアンケート調査の主な重点は、

- ・羽田空港の国際化後における海外旅行商品の造成・販売への取り組み
- ・羽田空港の国際化後に造成・販売された旅行商品の行先
- ・羽田空港発着の旅行商品の特質
- ・羽田空港の国際化に伴う旅行商品の販売面における効果

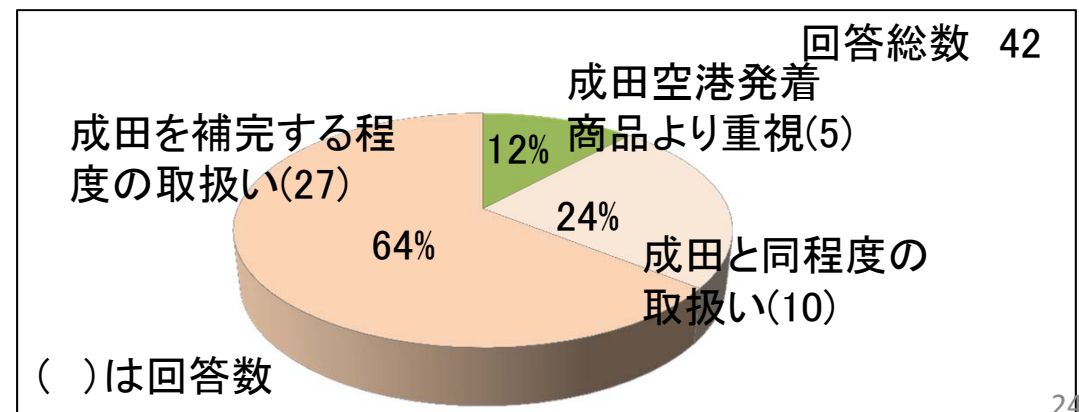
○アンケート調査の結果を踏まえ、実態をより深く掘り下げて把握すべく、匿名の旅行会社の御協力をいただきつつ、ヒアリング調査も実施。

旅行商品の造成・販売への取り組み

○羽田空港国際化後には、全体の79%の旅行会社が、成田発着旅行商品を維持しつつ、羽田発着旅行商品を造成・販売。

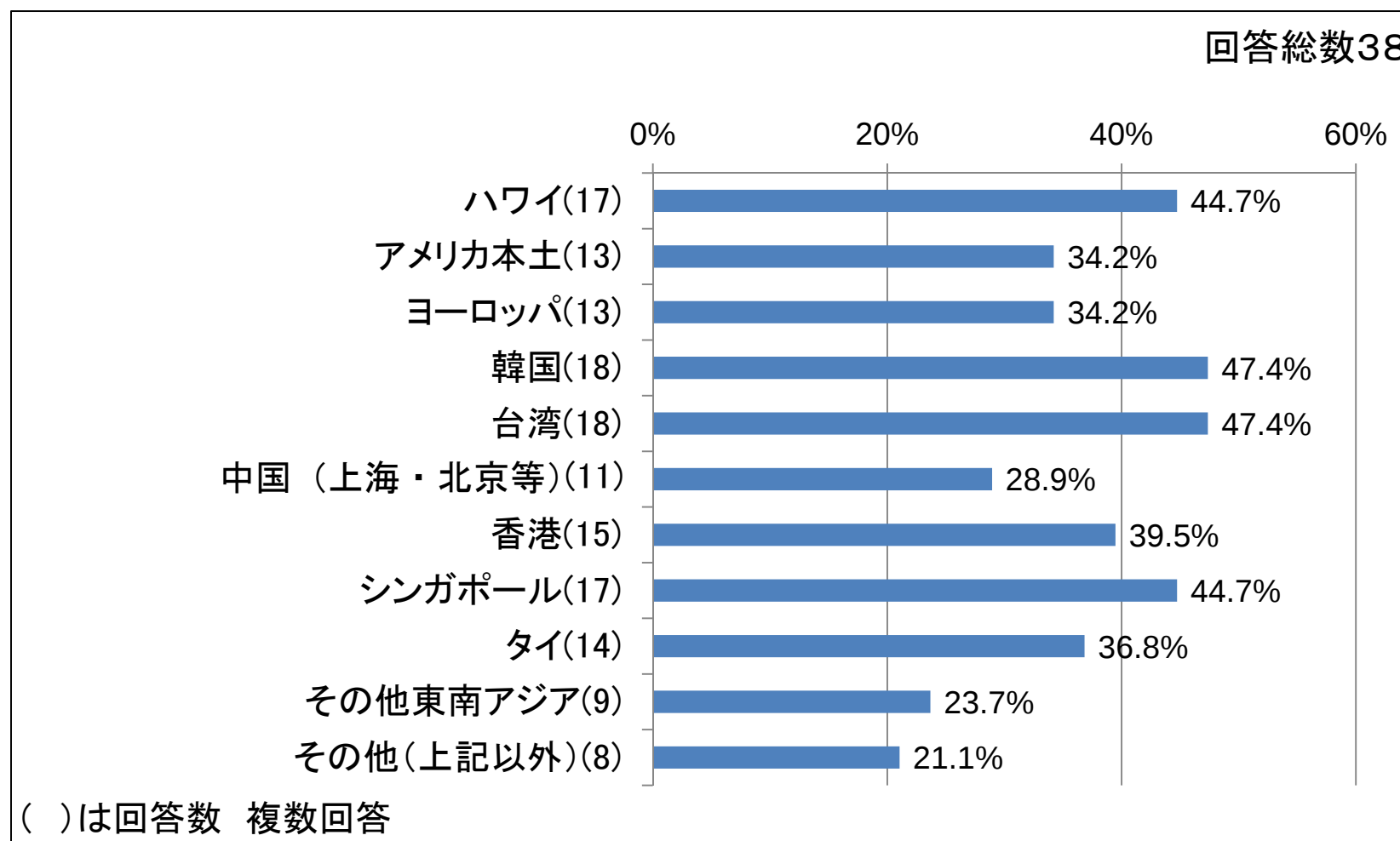


○全体の約64%が成田発着旅行商品に重点。

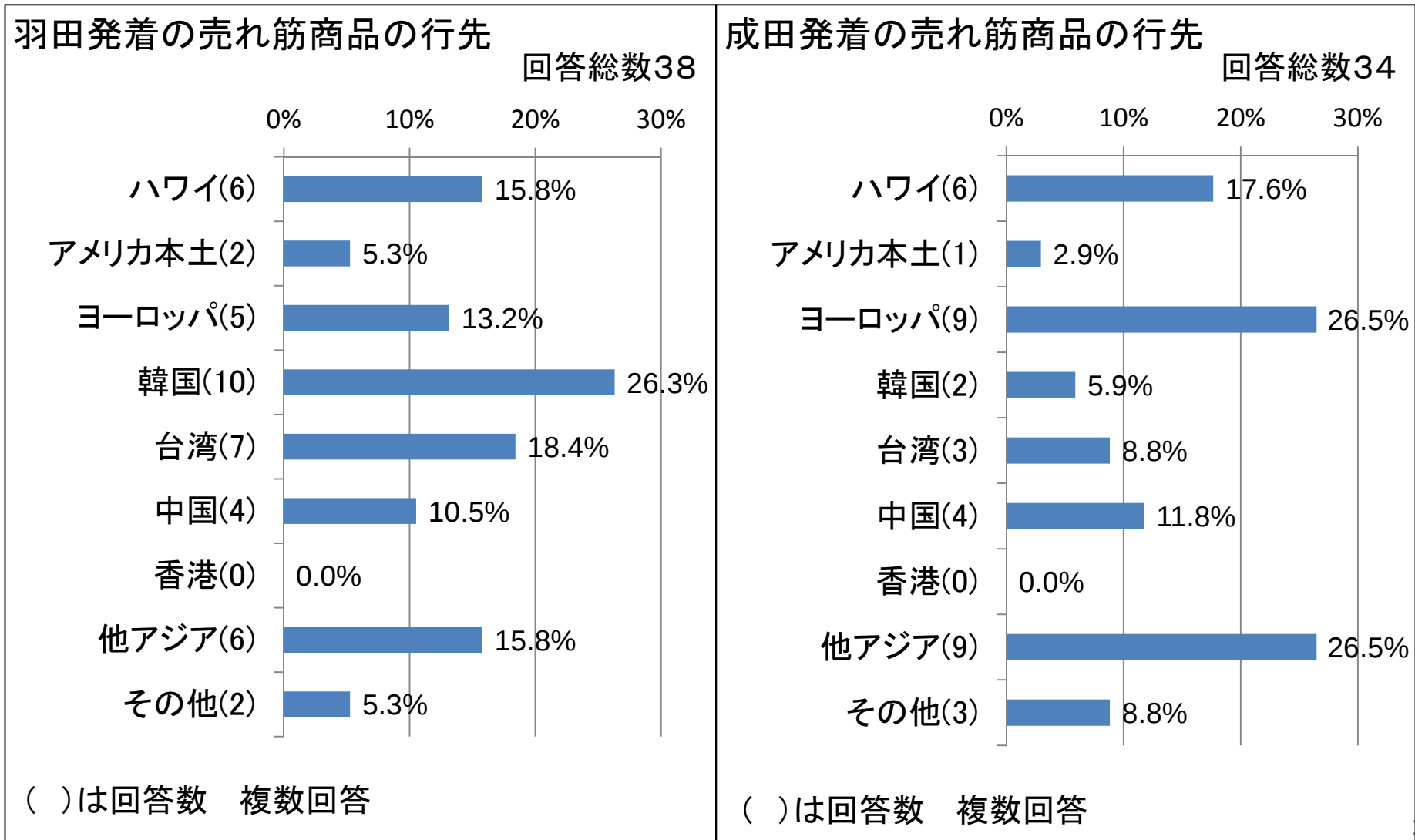


羽田空港国際化後における旅行商品の行き先

○羽田空港国際化後に造成・販売されている、同空港発着の旅行商品の行き先の上位は、韓国、シンガポール、ハワイ、タイ、台湾。



○羽田発着の売れ筋旅行商品の行先の上位は韓国、台湾、ハワイ。
成田空港発着の場合は、ヨーロッパ、ハワイ、東南アジア等。

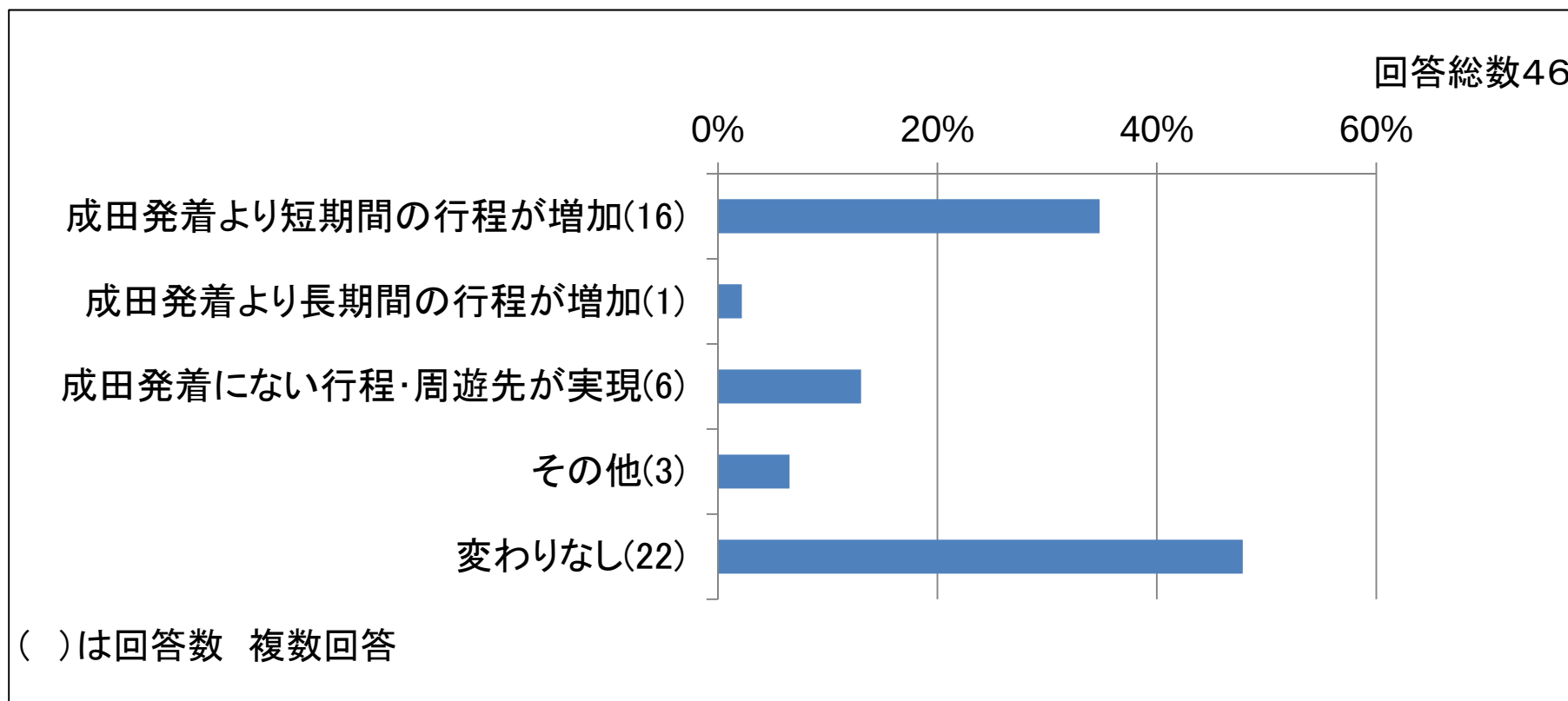


羽田空港国際化後の同空港発着商品の特質

(1) 旅行期間

○「変わりなし」との回答が多いものの、期間短縮化の傾向も認められる。

→ 例えば、深夜0時過ぎに羽田を出発する場合、前日出発のケースと比較し、旅行期間が実質的に短縮。



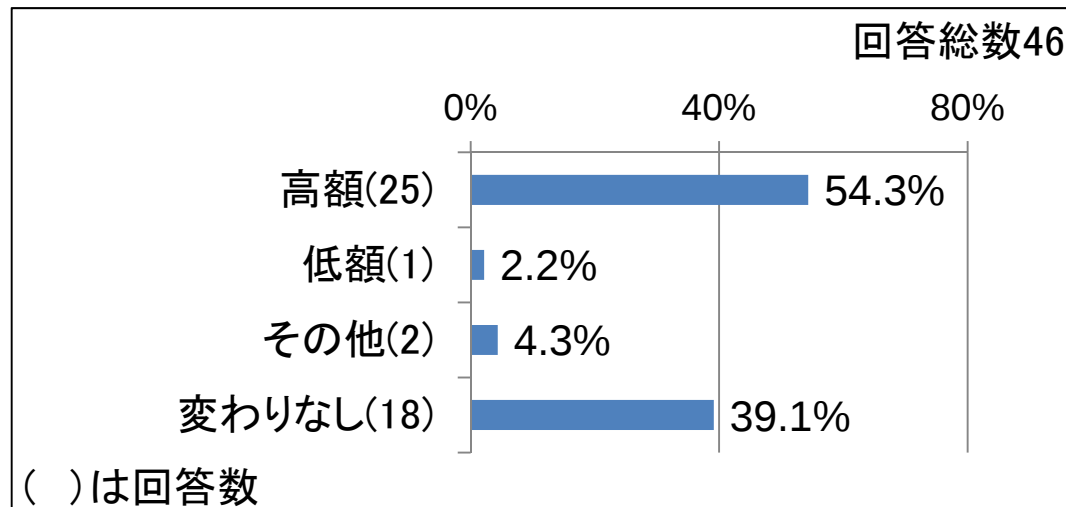
○成田発着にはない旅行商品の行程に係る事例については、以下のとおり。（東南アジアを行き先とする旅行商品を例示。）

行き先及び日数	旅行行程	備 考
シンガポール 5／6日間	往路：羽田を深夜発、シンガポールに早到着 復路：シンガポールを夜発、羽田に早到着	旅行期間が5日間の場合、 実質3日間の行程。 →3連休があれば旅行が 可能。
バンコク 5／6日間	往路：羽田を深夜発、バンコクに早到着 復路：バンコクを夜発、羽田に早到着	
バリ島 (インドネシア) 4日間	往路：羽田を深夜発、デンパサールに早到着 復路：デンパサールを午後発、羽田に(同日) 深夜着	実質3日間の行程。 →3連休があれば旅行が 可能。

注)旅行商品の場合、集合時刻は原則的に出発2時間前。このため、航空便の羽田空港出発時刻が深夜0時以降であっても、ツアー行程は、名目上1日分プラス。

(2) 旅行商品の価格(同一行程で比較)

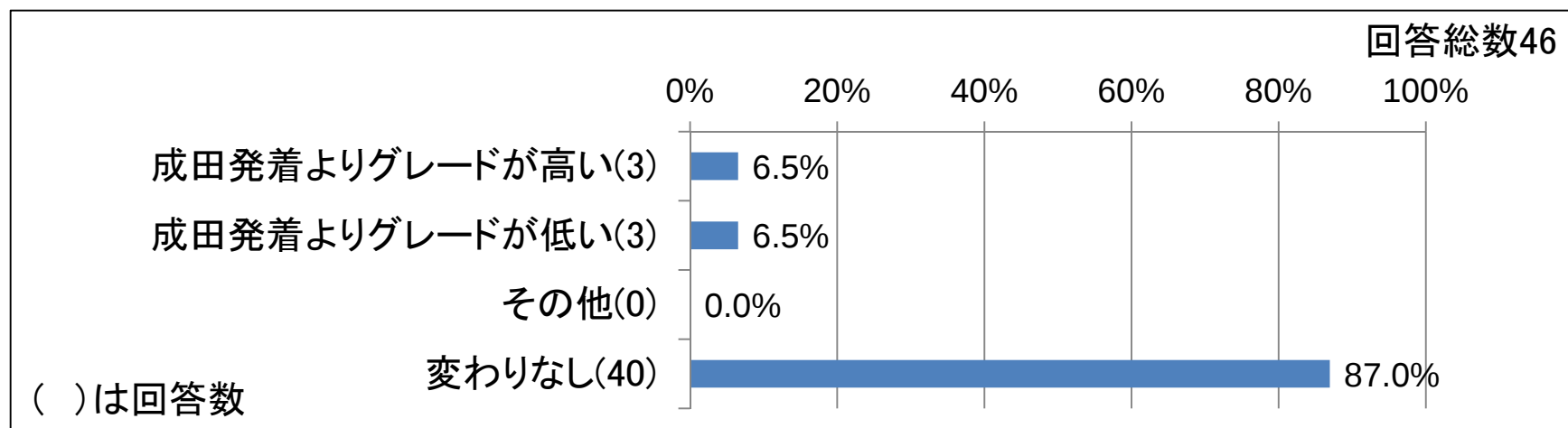
○羽田発着は、成田発着と比して高額なケースが多い。



→羽田発着の航空需要の特性により、羽田発着、成田発着の間に価格に差異あり。

(3) 航空機の座席クラス、宿泊施設のグレード

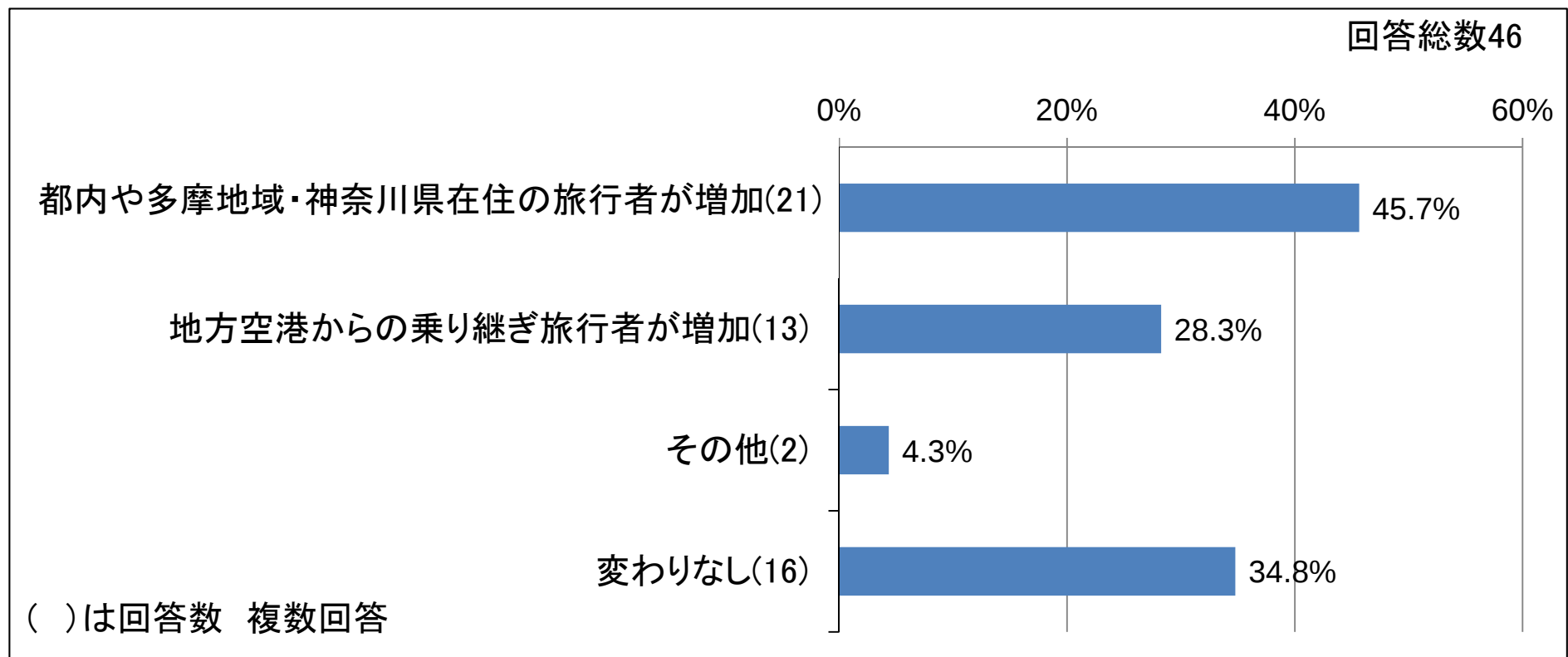
○「変わりなし」との回答が大半。



旅行者の特徴

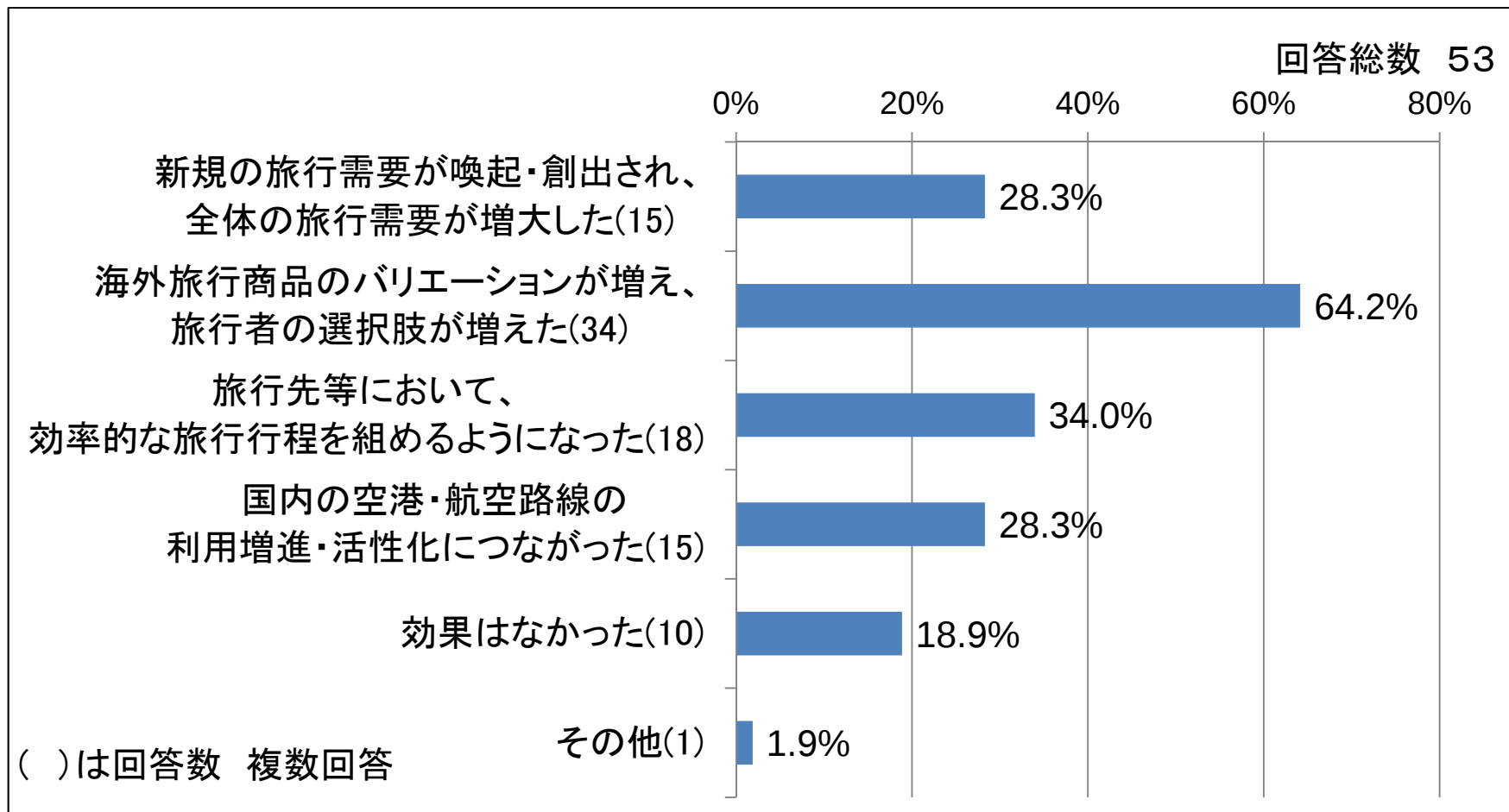
○羽田発着商品の利用者は、「東京都内、神奈川県在住の旅行者が増加した」とする回答が多い。（←空港の地理的特性を反映）

○四国、中国、九州の旅行者を中心に、「地方空港からの乗継旅行者が増加した」とする回答も多い。



旅行商品の販売面における効果

○「海外旅行商品のバリエーションが増し、旅行者の選択肢が増えた」とする回答が多い。(全体の6割超)



ヒアリング等において得られた共通のコメント

○羽田空港の国際化に伴い、四国、中国、九州等を中心に、羽田乗り継ぎのケースが可能に。

国内航空路線の活性化につながっているのではないか。

○羽田空港発着の長距離国際便の発着時間帯については、羽田空港の利便性をより一層高める上で、重要なポイント。

○羽田空港はアクセスも重要。とりわけ深夜・早朝便については、アクセス手段がないと、旅行商品化しても十分な需要確保が困難。

本日のアウトライン

1. 羽田空港国際化前後の航空旅客流動の変化
2. 羽田・成田空港利用者による空港選択の実態
3. 海外旅行商品の造成・販売への影響
4. まとめ

羽田空港の国際化に伴う効果、今後の課題

国際化に伴う効果

○東京、神奈川を中心に、首都圏在住の航空旅客の利便性が向上。

また、地方空港から羽田での乗換が便利になったことなど、羽田の国際化により、**地方在住の航空旅客にとっても利便性が向上。**

○海外旅行商品の選択肢が広がり、**旅行需要を喚起・誘発。**

➤ 羽田空港の国際化は**国際航空旅客全体にメリット**あり。

➤ **羽田・成田一体としての国際競争力**が増大。

厳しい航空大競争が展開されるアジア地域において、**我が国首都圏空港による高度なハブ機能の回復**に寄与。

今後の課題

首都圏空港全体の国際競争力向上を図るためには、羽田・成田それぞれのメリットを十分に活かし、より一層の利便性向上を可能にすべき。

○羽田空港発着の長距離国際便の発着時間帯

○羽田空港の深夜・早朝時間帯におけるアクセス

→深夜・早朝時間帯における航空便利用を確保する上で、重要なポイント。

ただし、本件につき考察するに際しては、

- ・アクセスに係る具体的手段（定期便の運航状況、需要との関係）
- ・旅客の居住地への到達可能性にも十分な注意が必要。